甲田の裾

KŌDA NO SUSO

「三内伽羅松の画譜」より「伽羅松冬恋図」工藤正廣 画

2017

1号

通巻692号

松丘保養園の機関誌

謹賀新年

本年もよろしくお願いいたします　平成29年

雪遊びするさくら保育園の子供たち

甲田の裾　平成29年１号　目次

平成29年年頭にあたって …… 入園者自治会　会長　石 川　勝 夫 … 1

ご挨拶 …… 内科医長　若佐谷 保 仁 … 6

滝田十和男さんを偲んで …… 松丘保養園名誉園長　福 西　征 子 … 8

第13回教育講座　青森県の短命から学ぶもの－後編

…… 弘前大学大学院医学研究科社会医学講座　教授　中 路　重 之 … 14

その後の本家の娘 …… 三 浦 喜美子 … 26

ある開墾の話 …… 木 村　龍 一 … 28

思い出食堂第４回　新城中学校の生徒との思い出食堂

…… 治療棟看護師　工 藤 まゆみ … 31

新城中学校よりのお礼状 …… 36

双仁会厚生看護専門学校・五所川原市立高等看護学院　施設見学感想文

…… 38

松丘の猫をさくら猫へ …… 甲田の裾編集局　石 田　史 子 … 44

人事異動 …… 47

自治会日誌・編集後記 …… 48

表　　紙：工藤正廣 画「三内伽羅松ノ画譜」より「伽羅松冬恋図」
※ロシア文学者で詩人の工藤正廣氏の描いた松丘保養園の絵巻の中から季節の風景を紹介させていただいております。

写真提供：叶　順次、福祉室

「甲田の裾」バックナンバー（平成24年１号～）は
下記ホームページより閲覧いただけます。

松丘保養園のインターネットホームページ
http://www.nhds.go.jp/~matuoka/

平成二十九年年頭にあたって

松丘保養園入園者自治会　会長　石川勝夫

謹んで新年のお慶びを申し上げます。

今年も皆様にとりまして、良い年でありますように、心からお祈りいたします。

昨年中は、会員はじめ多くの皆様の温かいご指導とご支援を頂きながら、自治会としての任務を果たすことができましたことに心より感謝を申し上げます。

年頭にあたりまして、この冬の天候は、どうもいつも通りとは違い、不順な気候となり、また少雪といった様は、青森の冬と言えるのかと思える気象が続いています。しかし、冬が過ぎれば、たくさんの植物が芽吹く季節、春がやって来ます。どうか、すべての皆様が健やかに笑顔でこの春を迎えることができますように祈念いたしますとともに本年もどうぞよろしくお願いいたします。

平成二十八年の一年間を振り返りますと四名の方々がご逝去なされました。ここに謹んで、ご冥福をお祈り申し上げます。

昨年年頭には、九十一名在籍していた入所者数が、一月一日現在では男性が三十五名、女性が五十二名の計八十七名となり、その平均年齢は八十五・一歳、平均在園期間は六十年を越えております。このうち日常生活に職員の介護を必要とする不自由者棟入居者数は六十四名となっており、入所者全体の約七十四％にあたっております。

往時、入所者数が八百名を越す程の施設であったと私達は伺っております。その頃の様子がどのような状況であったのか、今となっては思いをめぐらせることができません。がしかし、入所された皆様におかれましては、不運にも不測の病魔におかされ、

まだ病気に関する理解などもなかった中で、辛苦と忍従の人生を送らざるを得なかったのです。

ハンセン病患者を世間から完全に隔離することを唯一の施策とし、その上療養所というのは名称のみであり、医療らしき医療も受けられずに、厳重な監視のもと逃走防止の為、柵の中に閉じ込められながら、また更には過酷な労働を強いられ、それによって手足に障害を重ね、視力までも失い、等々まさに絶望の闇の中苦難と闘ってこられた皆様であります。本当につらい人生を歩んでこられたのです。

そして、このような悲惨な歴史を繰り返しながら、さらに差別、偏見といった社会の目にさらされながら、強制隔離生活を続けてまいりました。

しかし、その後の医学の進歩、また社会情勢の好転と相俟って、関係者の理解も深まると同時に、長年にわたる先輩諸兄姉より引き継がれた運動の成果も加わり、医療、生活、その他全般にわたって園内の状況も大きな変化と進展を見せるようになってまいりました。

そこで今、全国のハンセン病療養所において、取り組んでいる全療協が推薦する「人権擁護委員会」と「人生サポート」の設置が挙げられます。

この内、「人権擁護委員会」につきましては、入所者の高齢化、入所者数の減少が進む中で、自治会制度、世話人制度の維持が次第に困難となりつつある現状を考えますと、今後も入所者の人権を守り続けるためには、これらの制度に替わる新たな制度を整えることが必要であるとの理由により、考案された事項であります。

社会における医療のあり方に関する考え方は変化しつつあり、近年、各医療機関で人生の終末が近づいた患者の生を支援する仕組みや、患者の人権を守るための仕組みも整備されつつあるということです。各療養所の現状に適した制度を導入することが望ましいことであると考えられます。

入所者を取り巻く人権上のさまざまな課題および一般医療機関の動向や知見をふまえ、まさに最後の時期を迎えつつある療養所が入所者の人権が守られる形で運営されるために必要であると考えられる仕組みであります。

少し具体的に申し上げますと、入所者の高齢化が進み、認知症などの増加等は避けられない状況に

なっている療養所内において、医療等にかかわる倫理的及び基本的人権にかかわる問題について、当事者等からの訴えや依頼を受けて調査検討し、施設に対して意見を述べることのできる第三者機関であるということであります。よって入所者の人権を侵害するようなことが生じても、本人は認知症、また周囲の人も遠慮がちで、泣き寝入りをしてしまうというケースは少なからず生じていると思われます。それをきちんとサポートする機関として人権擁護委員会は貴重な位置付けとなりますし、今後必須の制度となります。

現在、松丘保養園では、施設幹部、医師、弁護士、教育関係者、自治会執行委員等の構成による「倫理委員会」、「人権擁護委員会」を両立した委員会を開催し、入所者の療養生活が豊かに安心で安全な人生を、さらに送ることができるように、意見を出し合いながら検討を繰り返しているところでもございます。現状に満足することなく、もっと生活しやすく、もっと安全に過ごすことができるようにするには、何をどうするのかを、常に追究していくことが求められるのではないかと考えます。

それらに関連して「人生サポート」の件について述べたいと思います。これの意味する所は、入所者の皆様が、「あなたらしく生きてもらうために、人生を支える。そして生活を支える」ということになります。

松丘保養園のすべての入所者が最善の生を送るために、入所者およびその家族に全人的な支援を行い、専門的な介入ができるチーム医療を行うこととしております。

入所者の平均年齢が八十五歳を過ぎた今、一人一人のこれからの生き方には、それぞれに希望されておられることがあろうかと思います。そしてそれを達成するための支援というのは、ますます重要なことになってくるのではないでしょうか。ご自分が納得のいく人生を全うしようとする時、その支援がなされるということは、今後の療養生活に対して、希望の光が差し込み、心おだやかに期待を持って過ごすことができるのではないかと思います。

この「人生サポート」につきましても、松丘保養園では、平成二十六年八月二十七日に「ライフサポートチーム」として立ち上げ、定期的にそれぞれ

の問題に関し、直接かかわる職員と副総看護師長、ケースワーカー等が、コミュニケーションを計り、検討されております。今後、さまざまな取り組み、そしてそれを実践されることがあろうかと思われますが、どうぞ宜しくお願いいたします。

今を見つめ直すと、入所者の高齢化、入所者数の減少が進む中、自治会そして世話人の制度を維持することは、近い将来困難を極めるといったことが、私達につきつけられているのです。これらの新たな制度につきまして、どうぞご理解下さいますように、お願いを申し上げる次第です。

さて、松丘保養園の施設整備につきましては、入所者、職員そして近隣住民の方々や新城中学校の学生通学路利用等を計ることを目的に、園西側に散策路を整備し、昨年竣工を迎えました。この歩道は、入所者と地域社会の交流の場として、施工され、これから少しずつでも利用されれば、ありがたいことであると思いますし、また是非、散策される皆様が、挨拶程度でも結構ですので、声を掛けられて、安全に歩行をしていただきたいと思います。

そして、旧第四センター跡地に建設が予定されております「社会交流会館」について、少し述べさせていただきます。

松丘保養園は創立以来およそ百八年に及ぶ歴史を刻んでまいりました。その歴史の中で、平成八年に「らい予防法」が廃止され、平成十三年には「らい予防法違憲国家賠償請求訴訟」の成立以後、ハンセン病問題に起因する人権問題、差別、偏見の問題点が指摘されて、様々な啓発活動が行われ、およそ一世紀に及ぶハンセン病患者、回復者に対する強制隔離政策の内容が少しずつ明らかになってきました。民主主義社会である現在、基本的人権の尊重がゆるぎないものとなっており、その中で過去において、また未だに差別、偏見の意識が社会の人々に残存している状況を黙って放置しておく訳にはいかないと考えるのです。

よってハンセン病患者に対する強制隔離の実態を明らかにし、人権侵害の真実を世に知らしめ、なぜ差別、偏見に至ったのかを明らかにし、今後ハンセン病に対する差別、偏見等が起こることのない社会を実現するために教訓として資料を保存し閲覧していくことは重要であると考えます。また、このこと

をきっかけとして、世の中には次から次へと生まれている差別問題等の解決につながるように努力しなければならないと思うのです。ハンセン病問題の啓発につなげる意味でも重要なことと考えるのです。現在は、全国の国立ハンセン病療養所においても、この取り組みがなされており、全国規模で人権問題について考えるいい機会ととらえて対処していかなければならないと考えております。そしてその中には、皆が集まってくつろげるスペースも設けようといったアイデアもいただいております。

松丘の今を考える時、入所者の減少、そして高齢化等が、真っ先に思い起こされます。しかし、入所者の方々は、さまざまな思いを持って人生を送っていらっしゃいます。生きるということは、辛いことでもあり、また生きていればこそ得られる喜びもあります。その『よろこび』を求めながら、探りながら、それを見つけるべく、人生を過ごしていくことは、理想とすべき所ではありますけれども、理想通りには行かないということもまた人生です。

しかし、理想的人生は、生きている以上、求め探りながら、生きていくためのテーマとして持続していくことだと思います。

今後も、いろいろな取り組みがなされ、運営されていくことと思いますが、入所者一人一人が、それぞれに絶対にぶれることのない『想い』を持って、ことに臨んでいかなければならないと思うのです。

これからも「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」の完全実施を求めて、行動を起こして行かなければなりません。

入所者の皆様におかれましては、ご自分の病気と闘いまた共存し合いながら、ご自愛専一にと祈念を致しますと共に、重ねて本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

以上、年頭にあたっての挨拶とさせていただきます。

ご挨拶

内科医長　若佐谷　保仁

平成二十九年一月一日付けで内科医長として赴任いたしました若佐谷 保仁（わかさや　やすひと）と申します。みなさま宜しくお願いいたします。松丘保養園の一員として「甲田の裾」で挨拶させていただけることを光栄に存じます。

私の出身は青森市で大学進学までの十八年間を過ごしました。お恥ずかしながら松丘保養園ならびにハンセン病について何も知らずに育ちました。岡山県倉敷市にある川崎医科大学にて医学を学び、講義にてハンセン病についても学びました。また、在学中は全くの初心者から始めましたので下手なのですが、室内楽の部活に参加しコントラバスを嗜みました。卒業後は、弘前大学医学部 脳神経内科学講座に所属し、医学部附属病院および青森市民病院、県立中央病院などにて神経内科の臨床ならびに認知症・神経変性疾患についての研究をさせていただきました。ハンセン病の症状に末梢神経障害がありますが、これまでハンセン病に接する機会はございませんでした。

普段、時間があるときは撮りためていたＮＨＫスペシャルを観るのが楽しみなのですが、あるとき瀬戸内の療養所でのハンセン病患者様が体験されたお話、あるいは京都帝国大学出身の小笠原登先生のドキュメンタリーを観る機会がありました。当時のハンセン病に対する誤った認識や対応から多くのハンセン病患者様が不当な扱いを受けてきたことを初めて知ったのです。

昨年八月、以前から川西健登園長先生より見学の

お誘いをいただいておりました弘前大学医学部神経内科の東海林幹夫教授とともに訪問させていただきました。園長先生ならびスタッフの皆様には施設をご紹介いただきました。ご多忙の中、ありがとうございました。その際に、初めて入所者様に接する機会を得ました。入所者のみなさまにとっては突然の訪問であったにもかかわらず、お話を伺わせていただくことができたこと、感謝申し上げます。その後、松丘保養園で働きたいという気持ちが大きくなり、東海林幹夫先生、川西健登園長先生のご高配により赴任させていただくことができました。

赴任して一月ほど経ちました。今は園長先生について、徐々に保養園での仕事を覚えている段階です。その最中、園長先生ならびにスタッフと入所者のみなさまとの間にある深い繋がりを感じました。当初、単純な内科管理のみを念頭に考えていた私の甘い考えは打ち砕かれました。中には家族同様とさえ思えるその関係あるいは医療・看護・介護・その他の支援は、それ程まで高いレベルのものに感じられたのです。私もそれに続くことができるのか、とても不安な気持ちになります。しかし、園長先生をはじめスタッフのみなさまに教えを乞い、入所者のみなさまの期待に応えられるよう頑張っていきたいと考えております。

真冬の中、まだ外は寒く難しいですが、暖かくなりましたら園内をゆっくり散策させていただきたいと思います。また、保養園の桜は見事だと聞いており、今から楽しみです。趣味についてですが、好きな音楽はクラシック音楽です。職場が変わりましたので続けられるかまだ分かりませんが、市民オーケストラに参加しております。楽器を弾く一方で、音痴のためカラオケは嫌いです（笑）。また、サイエンスや歴史に関連したＴＶ番組を観て余暇を楽しんでおります。

まだまだ若輩者の私です。至らぬところがあればご指導いただければ幸いです。

滝田十和男さんを偲んで

松丘保養園名誉園長　福西征子

長年、甲田の裾の編集員を務められた滝田十和男さんのご逝去に対して謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

滝田さんが亡くなられたのは昨年の夏の盛りの頃だった。その夏の始め、用事があって青森を訪れていた私に、滝田さんの体調が思わしくないと保養園に勤めている知人から報せがあり、また、病棟に入っているので見舞って欲しいとも言われていた。

しかし、訪ねた病棟の看護師が、「滝田さんは隔離室におられて、明日の朝、青森県立中央病院へ転院することになっています」と心配げに話すのを聞き、そんな状態のところを訪ねたら却って体力を消耗するだろうと思い、面会を断念した。

後になって少しの間でも良いから顔を出して、天地聖一さん亡き後の甲田の裾の編集を続けて頂いた御礼をすべきだったと悔やまれたが、手遅れであった。

それから十日ほどして京都の自宅に訃報が届いたが、保養園の病棟で、もう会うことは叶わないだろうと覚悟もしていたので狼狽える思いはなかった。

初めて滝田さんと近しく話したのは、保養園に赴任して幾らも経たない平成五年の夏の盛りの頃だった。

その頃の保養園の電灯は薄暗く、夜道は真っ暗であった。冬には、屋根が潰れそうなほど雪が積もった。中央渡り廊下はまだ未整備で、春になると、病棟や外来治療棟への往復の道は、雪解け水のために泥濘んで歩きにくかった。北国とは言っても、夏の盛りは

暑かったが、エアコンは装備されていなかった。
そんな保養園に三百八十人の入所者が住んでいたが、訪れる人は少なかった。
前後の経緯は覚えていないが、不自由者棟の居室で脱水状態になっていた滝田さんが病棟に運ばれてきた。意識が朦朧とするほどの重症で、補液の指示をするだけでは安心できず、夜遅くまで病棟を行ったり来たりした。当時の保養園は、まだ持続点滴がめずらしく、看護師達が懸命に勉強して取り組んでいた。
数日後、ようやく回復した滝田さんに、「なぜこんなに重症になるまで自分の体調が悪いことに気が付かなかったのか」、と尋ねたところ、「太り過ぎなので食事も水分も減らしていた。身体が怠かったが、こんなことになるとは夢にも思わなかった」、と真顔で返事をされた。
そばにいた看護師が、「発汗障害があるのに、夏の盛りにそんなことをされては困ります」と言っても、「見ての通り、俺は太っているので体重を減らしたかった」、と頑固に言い張るのであった。
「不自由者棟の暑い部屋でそんなダイエットをしてはいけない。よく看護師さんたちの話を聞いて下さい」、と繰り返し説明し、ようやく我流の急激なダイエットがどんなに危険であるかを理解して貰った。
ただ、滝田さんにも、「もっと早く教えて貰っていればこんな事にはならなかった」という言い分があった。知っていれば、こんなことはしなかったというのである。
その後、滝田さんのことがあったからという訳ではないが、不自由者棟では、以前に増して熱心に暑苦（ハンセン病療養所では脱水症を含む夏ばてを暑苦と言っていた）対策に取り組むようになり、朝夕、入居者の居室にお茶や白湯を配るようになった。もちろん、滝田さん自身も、以後、無茶なダイエットはしなくなった。
二十数年前のこのエピソードを思い出す時、大声で自分の意見を主張している滝田さんの顔が鮮やかに蘇る。当時の滝田さんは六十代の若さだった。個性が強く、思い込みが激しかったから、人に煙たがられることも多かったが、当の滝田さん自身は、自ら人を嫌うようなことはなく、むしろ、もっと人と話をしたい、人に好かれたい、寂しがり屋の人なつこい性格であった。

予防法が廃止されたころ、滝田さんから、「ずっと昔のことだが、俺は石鹸やナフタリンを持って行商をしていたことがある。釜石にあった会社にも勤めたこともある。今ほど身体が不自由ではなかったのでそんなことも出来たんだが、世間は甘くはなくて三年ほどでまた療養所へ戻った」、という話を聞かされた。

その時にもう少し、いつごろ、どこで、どういう経緯で行商をするようになったのか、どのようにして療養所に戻ってきたのか、詳しく聞いておけば良かったのだが、どういう訳か、その話はそこで終わって、私の頭の中のどこを突いても、それ以上の記憶は戻ってこない。

ただ、その時、滝田さんは、社会復帰という言葉を一度も使わなかったから、尋常の手続きを踏んだものではなかったのだろうという思いがあり、一瞬の判断で、話を継がないで聞き流したのかもしれない。残念なことに、その後、滝田さんから行商や会社勤めの話の続きを聞く機会はなかった。

後になって、これも故人になった福島政美さんから、「滝田は療養所から逃亡して、行商をして凌いでいたんだ」、と教えられたが、保養園には、若い頃に無頼の生活をしたり、療養所を転々として放浪していたという人が何人もいたため、滝田さんがそういう人達の一人だったと聞いても大きな驚きはなかった。むしろ、行商で身を立てていたという話の中に、ただ療養所の中で悶々とするのでなく、逃亡という非日常的な行為を使ってさえも、「自由」を手にしようとした若い時代の滝田さんの尋常でない実行力を思って、内心たじろぐものがあった。

そういう思いで、九十歳を過ぎた滝田さんの短歌を見ると、若い頃の透明な鋭い感性で詠んだ歌とは違った熟年の落ち着いた味わいがある。

冬の間に溜まりし落ち葉片づけて墓のめぐりに暫し安らぐ

（甲田の裾　平成二十七年第二号）

朝の戸を開け貫いたる目の前に桜ほつほつ咲き始めたり

（甲田の裾　平成二十八年第二号）

平成十八年にらい予防法違憲国賠訴訟に対する熊本地裁判決が下りて一息ついていた或る日、福島県出身

者の里帰り旅行に参加することになっている滝田さんが、「旅行は独りでしたい。付き添いは要らないと言い張るので困っている」、という話が看護課から伝わってきた。

その頃の保養園入所者の平均年齢は七十歳を超えていた。昭和十四年に宮城県に東北新生園が出来て以降、福島県出身者の多くはそちらに入所したから、他県出身者に先んじて高齢化が進み、その数は減る一方であった。

そういう中で、福島出身の滝田さん一人が里帰りを希望されたのだが、「一人旅をしたい。人の世話にならなくても福島まで行けるので、看護師や介護員の付き添い手配は無用だ」、と言い張っているのだという。

看護課が、目も耳も腕も足も不自由な、八十歳を超えた高齢の滝田さんを、一人で新幹線に乗せる訳にはいかない、事故があったらどうする、と心配するのは無理もないことであった。しかし、滝田さんにしてみれば、予防法は既になく、熊本地裁判決も下りた今、生まれ故郷の福島に行くのに、一人旅を希望して何が悪いと強気であった。

福島県の方は、里帰り事業の途中で事故があっては困ると困惑気味だったが、ともかく福島と青森の往復の新幹線旅行は保養園サイドの問題であった。

それから、福島県への旅行一つのことで、あれこれと果てしない議論が続き、結局、滝田さんと直接話し合って決めることになった。その結果、滝田さんの意見を入れた旅行計画が立てられたように思うが、詳しい内容は覚えていない。

後になって、福島滞在中の滝田さんが実に上機嫌で過ごしていたという話を聞いているから、付き添いは付いたのだろうが、滝田さんの言い分を汲んで、目立たないようにしていたのだろう。

平成十五年に天地聖一さんが亡くなった後、滝田さんは、「甲田の裾」の編集員をつとめたが、その後も、さまざまなエピソードがあり、時には、そのために気分を害する人があったり、場合によっては大きな問題に発展して収拾に手がかかったこともあった。

もちろん自治会の役員との折り合いは良くなかった。まずもって園の平和を維持することが大事な自治会からして見れば、我の強い滝田さんはやっかいな存在だったのだろう。

しかし、晩年の滝田さんの歌には、望んだように生きられなかった人生を振り返りつつ、己の老いを率直に見つめている穏やかな気配が漂っている。

今朝もまた少し温めのコーヒーのカップを卓に我れは幸せ

（甲田の裾　平成二十六年第二号）

湯の宿を会場とせる午餐会折り詰め開けてひまかけて食う

（甲田の裾　平成二十七年第三号）

日に一度ポットに水を注ぎ足して沸かしたる湯の減らぬ独り居

（甲田の裾　平成二十八年第一号）

横内巌さんから、「昔も今もハンセン病療養所は無礼なところだ。予防法がなくなろうと、熊本地裁判決が下りようと、その思いは変わらない」、「そうは言っても（後遺症のために）看護師や介護員の世話にならなくてはならないというのが情けない」、という話を聞いたことがあるが、確かにそうだろうと思ったものであった。横内さんのような気性であれば、腰を低くして人の世話になるのではなく、できることなら自立して生きたかったに違いない。

熊本地裁判決の後、社会復帰支援策が整ってから、横内さんは北海道の親戚を頼って保養園を出ていかれたが、間もなく、その親戚の家にも居づらくなられた。目がお悪かったので独居は難しく、どうしたものだろうと思案していたところ、平中忠信先生が代表をされている、「北海道はまなすの里」の皆さんがお世話して下さることになった。

結局、亡くなるまで、はまなすの里のお世話になり、保養園へ再入所するという話にはならなかった。そうする事で意地を通された。

滝田さんを思うとき、なぜか横内巌さんを思い出す。お二人は、仲が良かった訳でも、人柄が似ていた訳でもなかったが、保養園で何十年過ごそうとも、強制隔離という国策に対して率直な意見を吐露し、時には怒りを爆発させるという点で共通したものがあった。

外の世界に開かれているようで開かれていない保養園の生活にも苛立っていたが、重症の後遺症を持つ滝田さんは保養園に残らざるを得なかった。ただ、滝田さんには文才があり、散文、詩、短歌などを創作する

術を持っていた。いつの頃からかそれらの創作活動が、滝田さんの保養園での人生に不可欠のものになり、生きがいになった。

生き残りて独り善がりの歌並べ誌面埋める臆面もなく

（甲田の裾　平成二十八年第一号）

自らの力のみにより生き来たる日の一日もありやこの身は

（甲田の裾　平成二十七年第四号）

滝田さんから、ご自分の短歌や詩の自慢を聞いたことは一度もなかった。ただ、「昔の保養園は川柳が盛んだった。川柳だけは（全国のハンセン病療養所の中で）保養園が一番だった」、「高橋清夢だの、富樫鬼外だの、沢山の人が凄い川柳を作っていた」、と顔を赤くして話していた。根っこのところでは、他の人の力量を認めることができる、謙虚で、心の広い性格であった。

滝田さんのみでなく、御家族揃って大変ご苦労をされたことは、短歌に詠まれていて、大変な人生であったことが偲ばれる。

亡き妻の逝きたる朝も春雪の降り居たりけり二十年経ぬ

汝が眠る丘の墓処は春萌えの兆し促す風強く吹く

（甲田の裾　平成二十七年第二号）

父も母もこの園に死す残されしわれの余生を見守りてゐむ

（甲田の裾　平成二十八年第二号）

滝田さんはカトリック信者でもあった。どうか主の御許で安らかにお眠りください。

（平成二十九年一月記）

第13回教育講座　平成二十八年九月十二日

青森県の〝短命〟から学ぶもの―後編

弘前大学大学院医学研究科社会医学講座　教授　中路重之

長野県が一番長生きするランキング（次頁下）を見せましたけれども、青森県は最下位。ところが皆さん、長野県は、昭和四十年は男性九位と女性二十六位だったんです。年とともに段々上がってきたんです。昔は、沖縄がすごく長生きだったんです。今、男が三十位、女が三位で、この後まだこのランキングを落とすということがわかっています。青森はずっと最下位なんです。

皆さん、でも、青森は世界では相当長生きの方です。昭和四十年、青森県男性は六十五歳だったんですけど、平成二十二年七十七歳で十二歳長生きするようになりました。女性は十四歳長生きしています。みんな長生きしているんです。但し、同じ平成二十二年で比較すると長野県との間に二歳半の差がある。この差は大きいし、どうしてなんだという話になるわけです。

長野県がどうして長生きなんですかと聞かれます。答えは簡単「長野の人は熱心です」。向こうには、健康リーダーという、いわゆる保健協力委員とか、食生活改善推進委員みたいな人が山ほどいます。二十万人超えているんです。二百万人のうち健康のことをやる人がいっぱいいるんです。青森はいないわけじゃないんだけど、やっぱり数でも質でもだいぶ負けているんです。

だからわかりやすく言えば、長野市と青森市の市役所で健康に関する会議を開いたとします。その風景を写真にとれば同じです。見た目は一緒のことやっているんです。でもその次が違うんです。青森市でやっても、次誰がやるかっていう話になるんです。長野市はやる人がいっぱいいるから、どういう手でも打てるんです。ここが圧倒的に違うということを早く気づかないといけません。いくらテレビで騒いでも、仲間がいないとどうしようもないということを、私はいつも申

し上げています。

寿命アップ会議っていう、県の大きな会議があります。いろんな組織の人とか来られますけど、僕はもうそれに十五年出ています。今は三村知事が最初から最後までずっと司会をされています。しかし、会議が終わるたびに、ドーンと大きな壁があります。結局、それを誰がやるの？ということです。それに対して、答えを我々は出せない。情けないっていう気持ちが僕自身を突き動かしています。だから今、青森市でも弘前市でも、健康リーダー育成事業っていうのを一生懸命やっているところです。

下表は年代別の死亡率ですが、青森・長野・沖縄三県の平成二十二年の男性の十歳区切りの死亡率です。死亡率とは十万人当たりの死亡数です。この数字が多ければたくさん亡くなっているということでよくありません。0から9歳、青森県45と長野県35、10-19歳29と20、20-29歳82と72、このように各年代とも青森が高いですね。特に40歳代になりますともっとすごい差になります。40-49歳、青森県323と長野県171、50-59歳673と407、60-69歳1,448と948、70-79歳3,716と2,658というふうに、大体一倍半以上青森の方が余計死んでいます。こ

青森・長野・沖縄県の年代別死亡率ランキング
（人口10万人当たり、平成22年、男性）

	青森県		長野県		沖縄県	
	死亡率	順位	死亡率	順位	死亡率	順位
0～9歳	45	38（低い方からの順）	35	21	42	22
10～19	29	39	20	20	33	34
20～29	82	37	72	28	61	17
30～39	113	41	93	26	117	40
40～49	323	47	171	11	260	46
50～59	673	47	407	3	664	46
60～69	1448	47	948	2	1196	33
70～79	3716	47	2658	2	2808	11
80歳以上	11117	47	9719	3	9305	1

のくらい大きな差があるということです。むしろ八十歳を過ぎると近くなっています。

長野県と青森県では平均寿命が二歳半違います。よく、二歳半と言いますと、「いいじゃないですか、八十歳と八十二歳半の違いなんて大した差じゃないですか」とよく言われます。でも、これ、人生最後の差じゃないんです。一言で言えば、中年、働き盛りの年代が沢山死んでいるということなんです。我々の周りにもいますよね、四十、五十歳代で亡くなる人。まだまだ死んじゃ駄目な年齢です。

こうも言われます。「先生の言っているのは平均寿命で、健康寿命じゃないでしょう。健康寿命を延ばすのが大切じゃないですか」って。それはそのとおりですが、四十歳代、五十歳代で亡くなってる話に、健康寿命もクソもないですよ。健康寿命とは、八十歳以上とか、寝たきりになって、だらだらと延命措置をとられているようなことに対して話題になることなんです。四十歳代、五十歳代は死ぬか生きるかです。

青森県の男性の死亡率は四十歳を越しますと全年代で全国最下位47位です。長野県の数字はいいです。各年代でみると一位は少ないですけど総合で一位です。

ところが沖縄県を見てください。沖縄県では八十歳以上の『おじい』は今でも日本一の長生きです。ところが四十歳代、五十歳代になりますと、青森の次、46位は沖縄県であります。この悪い軍団が今後ぐっと年を取ってきます。あと十年したら、どうしても『おじい』から先に亡くなりますので、沖縄県のランキングはまだ下がるということになります。

次頁の表は健康に関係する指標の全国ランキングを示したものです。一番良い都道府県が一位、最下位が47位となっています。

「喫煙率」、「多量飲酒者率」、「食塩摂取量」、「野菜摂取量」、「肥満者の率」、「スポーツする人の割合」は、ことごとく青森県は40番台です「がん健診以外の健診受診率」も良くないです。一言でいうと全部悪い。

長野県はほとんど良い数字ですけど、「食塩摂取量」が良くない。言ってみれば長野県のアキレス腱です。長野県は海から遠くて塩漬けの文化が浸透しているからです。だから脳卒中の死亡率だけは今でも全国値を上回っています。「なるほど、塩を取りすぎると血圧があがって脳卒中が増えるんだ」みたいなことを長野県が教えてくれています。

沖縄県も良くはないんです。ただ、沖縄県は、「食塩

青森・長野・沖縄県の健康関連指標の比較

	青森県		長野県		沖縄県	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
喫煙率（平成25年）	47	46	8	18	9	23
多量飲酒者率（平成13年）	47	40	5	15	46	42
食塩摂取量（平成18～22年）	46	43	42	40	1	1
野菜摂取量（平成18～22年）	31	29	1	1	45	44
肥満者率（平成16年）	44	46	11	9	47	47
胃がん検診受診率（平成25年）	27	17	7	12	28	13
健診受診率（平成25年）	37	32	5	5	42	25
歩数（平成18～22年）	46	41	19	11	18	36
スポーツする人の割合（平成23年）	47	47	14	8	13	25
保健師数（人口当り）（平成24年）	25		1		20	
医師数（人口当り）（平成24年）	42		31		22	
県民所得（1人当り）（平成23年）	41		22		47	

摂取量」が一番少なくて、「喫煙率」が真ん中よりもいいんですね。その分、青森県より平均寿命ランキングが上回っているんだと思います。

よく言われるのが青森県の短命は、雪、経済力のなさ、医師不足という指摘です。雪のせいにしますけども、長野県も北半分、雪が降ります。だから冬季オリンピックが開催されたわけです。それよりももっとすごいのが福井県です。近々長野県を追い越そうとしています。あそこは青森県以上の雪国です、だから、雪のせいになんかしてられないです。また医者不足だと言われるんですけど、確かに青森県も42位ですけども、長野県も大変な医者不足で31位です。沖縄県も22位と多くはありません。それから県民所得。これもよく言われますけど、長野県の22位は青森県の41位よりは少し良いんですけど、沖縄県は相変わらず最下位。

雪、経済力のなさ、医師不足は確かに短命に少しは影響していると思います。しかしその影響は思ったほど大きくはありません。それよりも何よりも、その三つは簡単に解決できないものです。長野県はその話題を出さずに健康づくりに力を注いできました。そして今の長寿があるのです。要するにこの表の項目の総合点が平均寿命のランキングだと思ってください。

青森県の平均寿命対策

- “若死を減らす”＋“高齢者を元気で長生き”
- 生活習慣病対策＋自殺対策
- 生活習慣改善・健診受診・適切な病院受診・通院・治療が大切

⇩ なぜ実現度で長野県に及ばないのか？

- 基本：正しい知識と考え方（健康教養=ヘルスリテラシー）＋意識
- 県（地域、職域、学校）を挙げ盛り上がり：職域・学校がキーワード
- 根の張ったもの：健康リーダー（保健協力員等）←仲間づくり
- 自信を持つ：成功体験あり（塩分、喫煙→なんの悲劇もなくなしとげてきた）→必ずできる！

⇩

- 健やか力推進センター（今年4月開設、事務局：青森県医師会館）

短命の背景は中年世代の死亡率の高さです。それでは、中年世代だけに的を絞って対策をとればいいのでしょうか。

びっくりしたことがあります。長野県に健康長寿課っていう課があるんですよ。そこの課長さんが私に言ったんです。「中路先生、もう長野県は、日本一の長寿っていうのは大した自慢じゃないんです」と。カチンときました。人が一生懸命やっていることを頭から水被せられたような気持ちで。そこで「それではどういうものがご自慢でいらっしゃいますか？」と聞いたわけですよ。そうしたら、長野県は65歳以上の高齢者の就業率が日本一なんだそうです。えっ、嘘でしょうって。仕事を持っている人の割合が日本一だっていうんです。

ということは、長野県はお年寄りが元気だから仕事をしてるんだろうなと最初思ったんですけど、ところが最近はそうでもなくて、仕事があるから元気なのかなとまた考えています。

孫にマッコ（お年玉）やるのは、やっぱり自分でお金を持っておかなきゃいけません。だから私は、存在感というのはすごく大きいなと思うんです。お年寄りって、段々、存在感が小さくなってくるじゃないで

すか、年をとると。どうしてもそうなるんですよ、急激に。若者は将来がある。だから何にもできなくても存在感があるんですよ。私から見たら、若者ってすげえなって思う。

僕はつがる市の成人病センターに十年通って、お年寄りが何でこんなに縮（ちじ）こまって、周囲に気を遣っているんだろうって思って、その人ごとに聞いて回りました。そして、私の中に一つのイメージができました。津軽ですここは。津軽のお年寄りは、まず、耳が遠くなります。それから何を言っているのか聞き取りづらくなる。それから、昔の話しかしない。明日のことはなかなか語れない。それから、稼ぎがなくなる。少しの年金しか貰えません。そうすると、孫も子供ももうあんまり相手にしないというか、しゃべらないんですよ。

それで、六時半とか七時に夕飯食べたら、子供たちは、ダウンタウンの番組ばかり観ています。おばあさんたちは、あんまり早くて聞き取れないわけですよ。だから自分の部屋に行きます。そこには、あの有り難い電気毛布がある。テレビも小さいのがある。観てる。そっちの方があずましい。すぐ寝てしまいますよ。そうしたら、十一時に今度おしっこで目が覚めます。今度はなかなか眠れないです。うつら、うつらうつらと朝がきて、外は雪が降っています。その日は病院に行かなくちゃ行けない。しかし、若夫婦は共稼ぎです。病院に連れて行ってもらわないと、バスもなかなか乗れる場所でない。そうなってくると、若者に気を遣う。当然存在感は、ダーンと下がってくる。認知症になりますよ。やっぱりここを解決しないとダメだと。

長野県を見て思ったのは、やっぱり人間は年を取っていようが、そりゃあ大きさの大小はあるけど、やっぱり存在価値っていうものを周りに認めてもらう必要があると。

だから、元気だから仕事をしているのか、仕事があるから元気なのかって、本質的な問題だと感じています。やっぱり短命県返上っていうのは、言葉ではすごく簡単に、浅く聞こえますけど、実は深いなという気持ちがしています。

長寿の世の中は、お年寄りも存在価値を持ち、そして、子どもも元気なはずです。四十、五十、六十歳だけピンポイントで元気にするってできないですよ。世の中そうはできていない。長寿の場所は、年寄りも元気で若い人も元気だろうと。それに、我々は気づく必要があるかなと思っております。

皆さん、本当に頭の痛いことばかり私が言って、お腹立ちでしょうけども、これが現状であります。四十歳代、五十歳代の人がボロボロ亡くなっているんです。四十歳代、五十歳代の人が亡くなって、その数だけ悲劇があるということです。

そこでです。それでは、平均寿命対策というのはどうすればいいのかということなんです。いろんな切り口があると思いますけど、まず具体的には生活習慣病対策です。命を取られる生活習慣病というのは三つしかありません。がん、脳卒中、心臓病です。我々は、もう七、八割方、これで命を取られます。あとは自殺と事故さえ気を付けていれば大丈夫です。これがメジャーな病気ですから、これらの予防をどうすればいいかということが、長生きの一番のキーポイントになってくるわけです。

もう一回言います。がん、脳卒中、心臓病です。心臓病というのは、一番多いのは心筋梗塞ですよね。自殺も勿論あります。ただ、生活習慣病からすると断然数は少ないです。

そうしますと、生活習慣病ですから、生活習慣が当然関係してきます。健診も関係してきます。病院にちゃんと行くということ、通院することも関係してきます。実は、この青森県、今述べた項目で全て全国に負けています。特に長野県には大きく負けています。

例えば生活習慣。タバコ、喫煙率ですね。大酒飲みですね。野菜の摂取量、塩の摂取量、運動、全部負けています。肥満も当然負けています。それから、健診の受診率も負けています。それから、もっとびっくりしたのが、病院に行った時に、がんがもうすでに進んでいるんです。これ、皆さんどう思いますか。データではっきりしたんです。病院に行った時に、がんが進んでいるんです。

もう一つ、糖尿病をみてみます。糖尿病には三大合併症と言うのがあります。目が潰れる網膜症、おしっこが出にくくなる腎不全、足がビリビリしびれる末梢神経炎、です。三つとも圧倒的に青森県の場合は多いんです。つまり、病院にちゃんと通っていないということがあると思います。

だから、健康づくりだけで短命県は改善できないかもしれません。病院にもちゃんと行ってもらわなくちゃいけないし、病院にちゃんと通院しなくちゃいけないし、健診も受けてもらわなくちゃいけないということになるわけです。太るなとか、タバコだけで解決

できないんです。

どうして青森県の場合は、病院に行くのが遅いのかな？と思うんですけど、これはいろんな文化のこともあるかもしれません。病院に行くというのは怖い。病気になったらおしまいだみたいな・・。津軽には「命ほいど」みたいな言葉もあるくらいですから。

知識の問題かもしれません。加えて「お父さん、病院に行きなさい」と、奥さん、旦那さんが相方に言えるかどうかということもあると思います。

いずれにしても、何でこれ、全部悪いの？ どうすればいいんだろう？ といつも考えるんです。何故実現度で長野県に及ばないのか？ 一番簡単に言い切ってしまえば、根本が負けている。幹が負けている。だから、そこから出る葉っぱは全部負けているみたいなことになるんじゃないかなと思うんです。

だから、これは県民一人ひとりが考えていかないと。平均寿命だから病院の問題なんてことでは全然ないですよ。一人ひとりの問題ですから。

私は、だからこそちゃんとした健康に対する考え方、知識とかを持つべきだと思います。そうでない限り、意識は高くならないということです。

それから、もう一つ大切なことがあるんです。皆さん、この四十～六十歳代で沢山亡くなっているんですけど、これ、どういう病気で亡くなっていると思いますか。例えば四十歳代の人、何で死んでいるんでしょう。これも一緒です。生活習慣病です、七割方は。がん、脳卒中、心筋梗塞です。

四十歳代でこういった三大生活習慣病で亡くなるということは、どういうことなのか。皆さん、タバコを吸ってすぐに肺がんで死ぬことはないですよね。タバコを吸って肺がんになるまで三十年かかる。死ぬまでには四十年ぐらいかかると考えていいでしょう。だとすると、四十歳代でそういった病気で死ぬということは、もう十歳代あたりから勝負が始まっているんですよ。

だから、この四十歳代、五十歳代の人をどうやって救うかということになると、一つはレスキューです。水際作戦。健診に行きなさい、病院に行きなさいということですが、もう一つは根本的な作戦です。一人ひとりの力を付けていただくということです。それは、小学校、あるいはその前から勝負が始まっているということなんです。

その証拠に、青森県の定期検診の結果を見れば分か

りますけども、異常者率ってありますね。例えば、肝機能が異常になった率。圧倒的に青森県は高いです。つまり、三十歳代、四十歳代あたりから圧倒的に健康度で負けているんです。でも、四十歳前まではほとんど死にません。死亡率に差がつき始めるのは四十歳代からです。死なないと計算できませんから。

でも、今申し上げたように、実際は、その前から負けているんです。小学生あたりからひょっとしたら負けている。だって肥満傾向の児童生徒は全国トップクラスですから。

だとすると、もっと早く手を打たなくちゃいけないということなんです。自明の理ですね。理屈どおりじゃないですか。だとすると、やっぱり職場と学校というのがキーワードになってくると思っています。職場と学校でちゃんとしたことをやる。

職場、学校、地域ってあります。我々はそのどこかに必ず属しています。しかし、地域がすべての基本です。何故ならば、そこに家族がありますから。人間は親子の愛情・絆（きずな）で生きています。しかし、例えば、青森市三十万の人口で、三万人なんて集められないですし、三千人だって集められないでしょう。一％も集められないというのが地域です。今地域は年々弱くなっています。

ところが、学校と職場には、百％そこに人がいます。しかも若い人ですから、この人達を鍛えることは非常に意味があることです。だから、今からは職場と学校がキーワードになるだろうと思います。

さて、その職場の健康づくりです。どうやればいいのかなと、よく、皆さんからも聞かれるんです。

とりあえず一つお願いしたいのは、トップが健康宣言をやるぞと言っていただきたい。市町村もどこも、トップがやると言わない限り動きません。動きようがないです、絶対に。これは、トップが問われているんです。

今、青森県に四十市町村がありますけども、今年度中に少なくとも三十三の市町村が健康宣言を出します。七月は六ヶ所村、それから十二月に板柳町、それから来年になったら階上町がもう決まっています。私、それには非常にこだわっています。毎年、正月になったら全市町村長さんに手紙を書かせていただきます。「健康宣言やってください」って。その意味するところはこういうことです。

つまり、トップが手を挙げない限り下の人間は何も

できないんです。例えば、ある町からある日、保健婦さんと保健担当課の課長さんが来まして、「健康づくりやりたいから助言が欲しい」って言うんですね。でも、私、心を鬼にして言いました。「無理です」って。「皆さんの力じゃ駄目だ」って。普通怒るじゃないですか。自分達が一生懸命やっているのに。確かに一生懸命やっておられますけど、「でも相も変わらず短命県ですよね」。「どうすればいいんですか？」と聞かれます。「町長さんと会わせてください。そうでないと例えば教育委員会を動かせないじゃないですか。子供の教育に突き進めない。他の課の人は、全く無関心じゃないですかって。それだったら絶対短命県返上なんてできないんだって」。申し訳ないのですが、私、強く言わせていただいております。だからこそ、健康宣言が必要だと。

その町で健康宣言をやってくれました。私の記念講演会の時「町長さん、最後まで私の話、ちゃんと聞いてくださいよ」ということを何度もお願いしました。そしてちゃんと聞いていただきました。立派な町長さんだと思いました。

それからもう一つは、健康づくりは簡単じゃないということです。簡単に普及しません。一生懸命やれば

やるほど壁だらけです。だから、健康リーダーが必要になります。

例えば、この前青森県の会議で、どうすればタバコをやめさせられるんでしょうかということを投げかけた人がいて、みんな、うーんと黙ったんですよね。日本一喫煙県でどうすればやめさせられるんだろうって。そうしたら、ある人が言ったんですよ、広報に載せればいいって。またある人は言いました。東奥日報に載せればいいって。気持ちは分かりますけども、タバコを呑む人、そこを絶対飛ばしますから。そんな簡単じゃないですから。だからやっぱりこれは、人から人に受け渡すしかない。だからこそ、長野県がどうして同じ会議をやってもそこから先に進めるのかっていうことを考えるべきだと思うんです。そこは本当に地道ではあるけど、ある程度そこに同調していただかないとこういったことはできないんですね。

次は成功体験の話です。知識だけで行動は変わらないって言います。じゃあどうして今喫煙率はこの五十年間で五十何%も下がったんですかって。昭和四十五年の日本専売公社調査では、成人男性の八十三・五%がタバコを吸っていたんです。ところが一番新しい調査では二十九%台ですよ。つまり五十五%、タバコの

青森県の健康運動の近況

1. "短命県"認知度の飛躍的向上
2. 自殺率の激減：全国ワーストから34位へ
3. 健診受診者の着実な増加へ
4. 児童生徒の喫煙率の低下：全国値を下回る
5. 青森県の取り組み拡大："だし活","食命人","健康検定"など
6. 地域での機運向上：40市町村中33市町村(8.5割)で健康宣言
7. 企業での取り組み：みちのく銀行が厚労省"安全衛生優良企業"等に選定
8. 学校での健康教育：中南地区の小・中学校で本格始動
9. 学生活動の盛況：弘前大学人文学部学生Gが"日銀グランプリ"を受賞
10. マスコミの充実：東奥日報が"ファイザー医学記事賞大賞"を受賞
11. 健やかプロジェクトが本格稼働：15か所・1000人を対象に実施
12. 11年連続75歳未満がん年齢調整死亡率全国ワースト

← がん登録の精度向上による対策構築

喫煙率が減ったんです。行動変容が起きているじゃないですか。禁煙が嫌で首吊った人がいますか？って。いるかもしれませんが、一人ぐらいは・・。そういうことなんです。タバコも塩も一緒で、八十年前までは、どちらも身体に良いと言われていました。しかし、今から五、六十年前に悪いということが分かって。タバコは全部に悪い、それから塩は血圧に悪い、血圧ど真ん中ですから。それが段々科学的に明らかになってキャンペーンが起きて、そして今喫煙者はどんどん少なくなってきている。塩も、すごくしょっぱいのを食べると、身体に良くないなっていうのを我々自身が思っている。こういった世の中になってきている。やればできるんだということだと思います。

最後ですけれど、青森県は今、短命県の認知度は上がりました。自殺率は非常によくなりまして、全国ワースト三十四位まで、ほぼドンケツだったんですけど。健診の受診者がすごく今増えています。子どもの喫煙率が全国値を下回りました。親と分断しなくちゃいけないと思っています。いろんなことが今やられていますけれども、ただそうは言いながらも、がんの死亡率は相変わらずワースト記録を続けているということで、来年、平成二十七年の平均寿命が発表されます。まだ最下位脱出はちょっと難しいのかなと思っておりますけれども、その五年後には絶対に行き着かないといけないという風に思っておりまして、このように皆さんの前でもお話させていただいています。

今日の話は、皆さん個人に、自分の健康教養を高めるために、またそれを人に伝えて欲しくて、こういう話をさせていただきました。有難うございました。

中路　重之（なかじ　しげゆき）
長崎県出身
弘前大学大学院医学研究科社会医学講座　教授
前　弘前大学医学部　医学部長

※講演内容は、誌面の都合上、一部割愛させていただいております。（編集局）

その後の本家の娘

三浦　喜美子

甥や姪達より聞いた事をまとめてみました。

本家の娘は昭和十七年三月に結婚しました。

十八年に旦那の戦死の一報が届いた頃、長女を出産し、同時に離婚となりました。

此の年には、私の実家にも内孫の長女が生まれ、祖母・両親は喜んでおりました。本家では娘が女の子を産んで、二、三日後に兄嫁が三人目の子供である次女を産みました。

村では、この年に女の子が五人も産まれ、小さい部落本家の二人の孫娘は、まるで双子の様に同じ物を着て、仲が良く、祖母に連れられていました。嫁は憎くくとも、孫は可愛いかったのでしょう。

本家の娘は、我が子を育てる事もなく、自由気ままに暮らしていました。

昭和二十五年、五人の女の子の小学校の入学式の日に部落の方々が集まり、お祝いをしました。

その頃本家では母親は元気で勢力があり、家を仕切っていましたので、出戻り娘は益々我が儘一杯で、長男夫婦は常に小さくなっていました。その後本家の娘は長女を実家に置き再婚し、男子を産みましたがまた離婚して実家に戻りました。

それからしばらく実家に居ましたが、ある日姿を消し、遠い所の旅館で働いている姿を部落の人に見つかり、また姿を消しました。

結婚、離婚、再婚、離婚と、地に足が着いていない母親であっても、その娘は気立ての良い優しい子に育っていました。

中学に入学した頃より、ひそかに父親の親戚の方々と交流して自分の進路を相談して居たようです。東京に住んでいる叔母を頼りに高校卒業と同時に上京し、

叔母の持っているアパートの一室を借り、会社勤めが始まりました。

数年後、叔母や叔父達の力を借りて、一軒家を購入しました。良い思い出の無かった親でも、親は親。その親を呼んで同居したのです。

孫は可愛いとよく耳にしますが、本家の娘は違いました。孫をよく叱っていました。田舎の良い空気を吸って来ると言っては、実家に帰っていました。

その本家も甥達の時代になっていましたが、そんなことは関係なく、自分はこの家の一人娘だと、好き勝手に振る舞い、甥夫婦も好きなようにさせていました。一ヶ月位も滞在して上京しての繰り返しでした。

八十歳を過ぎた頃より、足を悪くしましたが、田舎に帰りたい為に一生懸命に治療、リハビリなど頑張りましたが、高齢なこともあり、田舎に帰るまでには回復出来ませんでした。

実家と言うより自分の住宅と思い込んでいました。産まれた時より、我が儘一杯に育ち、恐いもの知らずで、これが当たり前と思うようになり、回りが見えなくなって行きました。この様な生き方をした人は他にはいないと思います。私は羨ましいと思いました。田舎に帰れなくなり、本家の甥夫婦は心より安堵していることでしょう。

孫にも嫌われ、回りに友達も無く、外出も少なくなりました。その頃より、認知症も出て来て、施設に入りました。

小さい部落に沢山の話題をまいてくれた本家の娘も、九十三歳になりましたが、私はどうしても「本家のババァ」とは言えません。若い頃のあの美しい姿しか、浮かんで来ないからです。

あの五人の娘達も七十四歳となり、共に健在で連絡を取り合い楽しんでいるようです。

部落に一人も同級生が居ない私は、五人娘が羨ましいと思っております。

昔と違い、本家との交流も変わってきたようです。時代の流れでしょうか?長生きすると、悪い面ばかり耳にする事が多くなり、子供の頃を懐かしく思い出しております。

本家の娘と同級生だった私の姉が亡くなり十八年経ちました。施設に入っている本家の娘さん、今頃どんな夢を見ているのでしょうか…。

ある開墾の話

木村龍一

松丘保養園の西側は急な上り坂の先に位置しています。納骨堂の奥と言った方が分かり易いのかも知れません。広場があり、園内の行事で賑わったことを知る人もおられるでしょうが、忘れてしまった年齢になってしまいました。

唐松林が県道添いに植えられており、カエデ公園の名称だけ残っています。

県道は狭いながら、交通量の多い生活道路であり、学校があり。子供たちの通学道路になっています。

昨年、この唐松が県道に添って切り払われました。何でも遊歩道が出来るらしい。冬場の子供達のためなのか、私達には直接には関わりのないことですが、入所者を取り巻く環境が少しずつ変化しているという事でしょう。

そんな公園から南側に開けている丘陵地帯、県道の内側に伸びる散歩道は削られてしまいましたが、一時期は果樹園としてリンゴ畑が広がっていたようです。そんな時代を経て入所者のための野菜や花を植えて楽しめる場所と変わり、使用料を払ってでも作付けする人が多く、大いに賑わったようです。入園者が減り、高齢化も加わり、現在は数人の方が作付け面積を狭めながら畑に通っています。

私もその一角を耕す許可を受けて、すでに十五年ほどになります。畑としては最も南側に位置しており、栗の木や桜の老木、そして松の木が密集しており、野菜を育てるにはふさわしい場所とは言えず、ゴミ捨て場と言われたこともあったようです。

日当たりのいい場所があるのに、「変わり者」の噂もありました。半日陰を好む野菜もあるし、本来の目的は山菜類を先人が育てた形跡が残されており、手間のかからない自然の恵みに興味がありました。

木立のある地形は遊歩道としての散策路となり、ベンチや椅子を置くことで癒やしの空間となり、見晴らしもよく気に入っている場所となっています。月日が

流れても整備は続いており、雑草地がヒマワリやコスモスの咲く場所へと生まれ変わっております。ほどほどの手入れをすることは自然にやさしいことなのです。畑仲間より頂いたウルイやウドも定着しましたし、アイヌネギ、ミズ、フキ、カライモ、シドケ等々も順調に株を増やしています。健康の維持のためのほどよい身体を動かし汗を流すことがボケ防止対策として考えている次第です。

畑に関わっていると、横のつながりのお付き合いもあります。秋田は隣りの県ですが、作付が一ヶ月遅く、秋仕舞いも一ヶ月早いようです。当然作付する種類やタイミングも違うので沢山のヒントや工夫を教わることが出来ました。作物の苗のやりとり、手伝いなど、どんどん広がります。畑を見せていただくことで参考になるのです。

趣味であり、健康を保つ運動であり、人によっては実益にもつながっているようです、新鮮な野菜や山菜は健康を保つ源ですから、お裾分けにも笑顔のお返しが嬉しいものです。

漬け物はお茶をする折りの話を広げる中心となりますが、『いぶり』はなかなか出来そうで出来ないようです。私以外やる方はいないようです。むしろ園外の方が興味を示し、覗きに来るようになりました。ニンジン、唐芋、タマゴ、魚、肉なんでも挑戦し、独特の風味は捨てがたいものがあります。本来の風味と柔らかさが課題です。遊びとも本気ともつかない挑戦ながら、奥の深い、楽しい喜びです。園内には畑名人と呼ばれた方も多く、昔ながらに受け継がれているやり方も、残念ながら忘れ去られるのも時間の問題でしょう。

一級品の山菜採り名人もおりましたが、山に入れる人さえおりません。料理名人の味の話も聞くことがなくなりました。年を重ねることは、小さな交流であるお茶をする機会さえなくなろうとしています。復元し、看護する立場の人が一人の主婦としても再現させる取組もあり、貴重な資源をひとつでも残す努力が大切です。私も応援する一人です。

私にはもう一箇所の遊び場所があり、その昔養豚をされていた療友がおり、そこを受け継いだ療友、その療友から受け継いだ場所です。私のライフワークとしての、やきものの拠点として整備し、専用のやきもの常設展示場や燻製を作ること、日曜大工、もちろん日当たりの良い畑もあり、果樹の木、そして花など、盛りだくさんなので、毎日のように現場には次から次へと仕事が眼につきます。

案山子ロードは蟹田方面に向かうルートですが、面白いのでアイデアをいただき、我が畑でも再生され、カラスに対して睨みを期待しましたが、カラスには通用しないようです。モグラ対策の風車は効果があるようで、地中に伝わる振動が嫌なようです。ペットボトルと針金（衣料用）があれば出来ますので、廃物利用にもなります。材質もドンドン増え、年間を通して廻るよう手入れをしている次第です。

やきもの工房を「松丘窯」としたことでチェックが入り、看板の取り付け場所にケチが付き、趣味が役立つはずが、全く違う方向へとドンドン離れる結果となり、ボタンの掛け違いは解決することはないようです。

やきものがすべてではありません。燻製や日曜大工と畑に関わる部分でも土作りの工夫は沢山あります。利用する人もいる雑草が気になるタイプなので、年中草取りに追われている状況です。

開拓に関係したもう一つの大きな下地がありますので、記して置くことにします。

三十年以上も前のことになりますが、秋田市にて働いていた頃の話です。秋田市の東の太平地区という山麓に原野を手に入れました。三六〇坪ほどで、昔開拓の手が入ったとのことですが、荒れ放題でスコップさえまともに刺さらない状況でした。

機械力に頼らず、鍬とノコギリ、スコップのみで原野を切り開く挑戦が始まりました。積雪が多く、冬期間は休むしかありません。垣根として植えた青木は鹿に食べられ、果樹の桃は熊に全部食べられたこともありました。自然のルールに教わり山菜類に興味を持ったのもこの頃でした。一坪ずつ土が広がり、黒ぼくの肥えた土壌は何を植えてもよく育ち、張り合いのある生活が続くはずでした。望まない形で再入園させられ、畑は荒れ始めても、毎年のように草刈りに通っていたのです。皮肉な巡り合わせで、熊本裁判で社会復帰の波が起こっても、私はその波には乗りませんでした。すでに生活の軸足が青森にあり、やきものに関わり、施設や自治会との不協和音も表面化する状況、もうこれ以上書く必要もない展開は尾を引き、現在に至っているのです。

どこでどのように生きても一生、体力が続く限り、趣味に生き、野菜とつきあい、そして草花を愛でること、少しは不満を活字にしつつ、ここで生きた証しを残せるよう微力ながら努力するつもりです。

平成二十九年一月記

新城中学校の生徒との思い出食堂

治療棟看護師　工藤　まゆみ

十月の下旬、十一月八日、九日に行われる新城中学校の職場体験学習で、思い出食堂を開き「豚汁とがっぱら」を作ってほしいと言われました。時間は十一時から十三時までで一緒に作って食べるということでした。いつも思い出食堂を手伝ってくれる入所者に声をかけると「いいよ」と言ってくれましたが、「その時間だと豚汁に味がしみないから美味しくないよ。」「がっぱらは一時間かけてゆっくり焼くから時間的に無理。」という声があり、実現は難しく感じられました。しかし入所者の残念そうな表情を見た時、なんとかしたいと思い、料理番組の担当者のように段取りや時間配分を考え、総看護師長に生徒と一緒に作る時間を調整してもらい、それでやってみよう！ということになりました。

思い出食堂の前日には、坂本栄子さん、浜野あや子さんと一緒に生協に食材を買いに行きました。豚汁に何を入れるか、どれくらい買うかなど、あれこれ言いながら、買い物は一時間もかかりましたが、それも楽しい時間でした。

今回の思い出食堂は、介護員が手伝いに来てくれました。八日は２Ｃの金澤礼子さんと病棟の淺田卓也さんが、九日は中央１階の藤田淳子さんと中央２階の柿崎敬子さんが手伝ってくれて、入所者は普段交流のない介護員との談話も楽しそうでした。

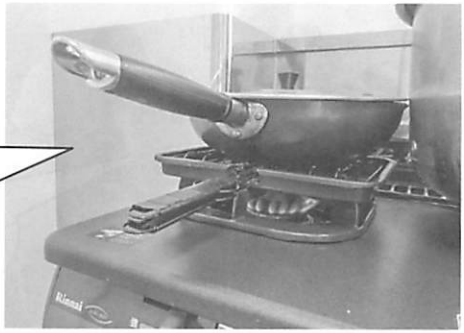
当日は文化センター九時集合で調理は始まりました。一枚一時間かけて焼くがっぱらは生徒達が来る前に見本を一枚焼いておきました。田沢忠さんに分量を聞きながら、生地を混ぜ、フライパンにかけて間もなく、コンロのセンサーが作動し、何度も火が消えてしまうトラブルが発生して、がっぱらの焼き具合がとても心配でした。その後トラブルは解消し、ふっくらと美味しく焼けました。

豚汁の方は、こんにゃくとごぼうの下ごしらえをして生徒達を待ちました。

台所の大きな窓から生徒の姿が見えた時「来たよ。」と手を振ると、生徒達も手を振って答えてくれました。初々しい中学生達と軽く自己紹介をすませて、早速調理です。ほどよく焼けた田沢忠さんのがっぱらに煮豆をのせたり、豚汁の野菜や肉を切って貰いました。坂本栄子さんは手を取り包丁の使い方を教え、浜野あや子さんは心配そうに見守っていました。いちょう切りをおばあちゃんに教えて貰って知っていた生徒や六十歳代のおばあちゃんが、たまにがっぱらを作ると言っていた生徒もいました。一段落したところで次の体験に行く生徒達を見送り、私達は調理を続けました。昼に生徒達が戻って来た時には、あったかい豚汁と甘い香りのがっぱらで迎えました。お弁当を持ってきた生徒達と入所者、協力した職員が一緒に昼食を摂り、生徒達の話しを聞き、楽しいひとときでした。豚汁をおかわりした男子生徒もおり、食べっぷりに若さを感じました。最後は、「勉強がんばってね。」と握手をして、またひとつ思い出ができました。

11月8日(火)

とろ火で長時間焼くので、
田沢さんはこんな業を使って
いました。



卵１個入れて。
殻のまま入れればダメだよ。
割って入れてよ。

分厚く膨らんだがっぱらは
ひっくり返すのが一苦労。
蓋を上手に使って、慎重に。

入所者のみなさんは、生徒
たちが可愛くて可愛くて
たまらない様子でした。

11月9日（水）

田沢さん「手かして。」
学生「くすぐったい。」

みんな、思ったより上手に切れていました。
最後に１kgの豚バラ肉をテーブルに出した時は「ワーッ」とこの日一番の盛り上がりでした。

昨日、すぐ切らなかったから皮かかって堅くなったんだ。
だから、すぐ、切ってラップに包んでおく。

中谷先生も囲んでの食事会でした。
生徒のみなさん、
楽しい思い出
ありがとうございました！

手伝ってくれた介護員に感想を聞いてみました。

金澤礼子さん…入所者は「孫のようにかわいい」「昔はみんな集まって料理したものだが今は高齢になり出来なくなった。こういう機会があって楽しい」と嬉しそうな表情を見せ話していました。学生の緊張をほぐすかの様に入所者の方からすすんで声をかけているのを傍らで見ていて微笑ましく思いました。自宅で料理をしている生徒、していない生徒の違いは見ていても分かり、入所者から手ほどきされると素直に応え、覚えようとする様子が窺えました。なかでも、二人の男子生徒が率先して関わっていたのが印象的でした。

淺田卓也さん…ぎこちない手つきの私に「こうやって良く作ったんだよ」と優しく教えて頂き、職人技のようにテキパキと作業をすすめる入所者の方を見て、主婦にはかなわないと感心しました。生徒さんにも包丁の使い方を分かりやすく教えたり、豚肉を鍋に入れる前に酒を振れば臭みが取れ、肉がバラバラになるなど主婦の智恵の連続で驚きました。田沢忠さんに私の嫁の実家では余り米でがっぱらを作ることを話したら「余り米は固くなるから、小麦粉だと軟らかくてメェ～んだ」と教えてくれました。大変楽しい時間を過ごさせて頂き、機会があればまた参加したいです。

藤田淳子さん…狭い調理場の中で、ひ孫のような中学生達に材料の切り方や調理の仕方を笑顔で教える入所者さん、自分の出来ることを一生懸命探し、一緒に調理する中学生達の生き生きとした顔等たくさんの笑顔を見ることができました。子供達と交流することの少ない入所者さんですが、言葉を選びながら優しく教えていました。そんな双方の楽しそうな様子を見て、お手伝いしていた私もほんわかした気持ちになった一日でした。

柿崎敬子さん…普段、家で作る豚汁とは少し違い、こんにゃくを手でちぎったり、肉に酒を振り、最後に鍋に入れるなど、いろいろ勉強になりました。入所者の方は、生徒さんに優しく野菜の切り方を教えたり、家族の話を聞いたり、とても楽しく会話も弾んでいたように思います。生徒さん達も素直に話を聞き、スムーズに進んでとても良い時間を持てたと思います。みなさん、ご協力ありがとうございました。

ざいました！

対

2学年より

いろんな方と話して、生きる勇気をもらいました。豚汁がっぱらもち作りは楽しかったです。

氏名 田村 魁翔

入所者さんと豚汁やがっぱらもちを作ったり、車いす体験をさせてもらったりと、とてもいい思い出になりました。

氏名 田中 陽花

僕は、松丘保養園でいろんな入所者さんとのコミュニケーションの仕方が分かりました。とても生きる力をもらいました。

氏名 名古屋 勇治

今回の福祉体験では、入所者さんにおかんもいただいたり大変良くしていただきました。これからにしっかり生かしていきたいです。

氏名 高橋 灯

将来は、介護士になりたいと思っています。とても参考になってあいさつをしてすごくいい経験になりました。ありがとうございました。

氏名 高木 麻央

ありがとうこ

新城中学校

先日は福祉体験をさせていただいてありがとうございました。食事会でのお話ではじめて知ることもあったし入居者の方とコミュニケーションをとれたこともよい経験になりました。入居者の方のお話をもっと聞きにいきたいです。

氏名 阿部 千草

ぼくは松江保養園に行ってみて、色々な事に気付きました。目や耳手などが不自由なのに、形も変えたりして一生懸命やる姿にとても感動しました。ぼくも自分が出来事にしっかりとやりありがとうございました。

氏名 岸元 晴大

ぼくは、保養園に行ってみてだけが、がっぱらもちに小豆を入れられてよかったです。いろいろな体験もしてとても楽しかったです。いろいろなことを教えてくれてありがとうございました。

氏名 長内 涼翔

私は保養園に行って、特に三上さんと八木橋さんにお世話になりました。たくさんの入所者さんとお話をして、生きるパワーをもらいました。本当にありがとうございました。

氏名 伊東 稜生

保養園の方々と交流して、どのような場所でどんな方が暮らしているのか知ることができました。良い体験をさせていただきありがとうございました。

氏名 小笠原 颯

保養園の方々と交流して、体が不自由でも、私達と話すときは、笑顔でいてくれたのが、とても、うれしかったです。今回は、本当にありがとうございました。

氏名 石井 理乃愛

看護学生　施設見学感想文

平成二十八年十一月一日厚生病院附属看護専門学校三年生十八名、十二月八日五所川原市立高等看護学院三年生三十三名が、それぞれ当園に施設見学の為来園。石川勝夫自治会会長の講演などからハンセン病について学びました。

双仁会厚生看護専門学校
「国立療養所松丘保養園施設見学を終えて」

看護専門課程　看護学科　第46回生　三戸瑠華

国立療養所松丘保養園の見学を行い、ハンセン病患者がどういった経緯で社会から偏見・差別されるようになったのかを聞くことができ、また松丘保養園が入園者さんにとってどんな場所なのかを知ることができました。

ハンセン病に感染すると、末梢神経が侵され変形が症状として出現するため、それを恐れたことと病気に対して無知であったことであると知りました。しかし、最大の原因が国家による隔離政策で、これが差別を強めたということを知りました。病院では治療という治療は行われず、患者が患者の看護・介護をしていたことを初めて知りました。病識はありましたが、何故差別されるようになったのか分かりませんでしたが、講話を聞きショックを受けました。退院しようとしても周囲は縁を切り金銭もないため、どうしようもなかったということを聞き、社会復帰が困難だという理由が分かりました。この講話を聞き、入園者さんは、暗く会話ができないのではと思いましたが、それは間違いでした。実際話をしてみると、とても明るく沢山の事を教えてもらいました。院内通貨はどんなことに使っていたのか、どんな生活をしてきたのか等を聞くことができました。大変な時代を生きてきたはずなのにどうして明るく過ごせているのかは、施設内でのイベントや外出、取組の内容に関係していると感じました。

その中でも注目したものは、身体拘束の廃止でした。ベッドから起き上がるのは起きたいから、車イスから立とうとするのは立ちたいから、何かの行動には必ず理由がある。その理由を考え徹底した看護を行っ

た結果、身体拘束をしている利用者さんを減らすことができたということを知り、これは病院でも他の施設でも言えることだと思いました、行動ひとつひとつには意味があり、看護師はその行動について考えるのもケアの一環だということを学ぶことができました。

「松丘保養園での見学実習を終えて」

看護専門課程　看護学科　第46回生　新岡千穂

恥ずかしいことですが、この度見学に伺う直前までハンセン病について余り知識がありませんでした。病気によって顔や手に変形が見られたり、隔離や差別の歴史があったという程度のものでした。今日の限られた時間の中で、入所者の方々、スタッフの方々から私達に向けられた強いメッセージは、自分の看護観に間違いなく強い影響を及ぼし、看護の枠を越えて社会との関わりについても深く考えるきっかけとなりました。以前、青森市石江地区で仕事をしていたのに、松丘保養園について知ろうともしなかった自分を恥ずかしく思います。

石川自治会長が見せてくださった園内通貨は、園から一歩出たら使えないお金でした。財産の価値を制限し、園から出ても何もできないんだという気持ちに追い込む効果があると考えました。また、断種や避妊手術、人工妊娠中絶が強制的に行われていたことや、警察による強制的な隔離など、日本国憲法に反したことが長年行われていたことは、日本人として知らなければいけないことだと思います。

『一つのカテゴリーで人を集めてはいけない。地域で共存していたのに、探し出して集めることで恐怖や差別がうまれる』と、川西園長のお話にありました。このことを知った私達は、これから日本が再び道を誤らないように監視していく役割があるのだと思いました。

お忙しい中、貴重なお話、ご講義をいただきありがとうございました。

「松丘保養園を見学して」

看護専門課程　看護学科　第46回生　小野寺真子

松丘保養園での見学実習を終えて、ハンセン病とはどのような病気であるか、感染した方々は療養所の入所を余儀なくされた後どのような生活を送っていたのかを知ることができた。入所者さん本人の体験談も聞

くことができ、入所後は退院できないように所持金を全て取り上げられて院内特有のお金に変えられてしまったり、院内に火葬場や納骨堂、礼拝堂を設置され、生涯の生活を施設内で過ごさなければならない状況におかれてしまったという歴史があることも知ることができた。当時は、看護師さんや介護をしてくれる方も少なく、食事や洗濯、傷の処置なども全て入所者さん同士で行い、後遺症もある中で過労働を行って行く辛さなど入所者さんの思いも実際に聞くことができた。そのように辛く苦しい思いを経験されてきた入所者さんが現在は後遺症をかかえながら松丘保養園で生活されている。高齢者の方が多いが、入所者さんが持っている能力を十分に活用し寝たきりにならないように一人一人に合った支援が行われていることを説明していただいた。実際に足浴を見学したが、その方は認知症もあり発語が困難な方であった。しかし、看護師はしっかりと目を合わせ、優しい声がけをしタッチングを行いながらユマニチュードに基づいた手法で足浴を行っていた。入所者さんは足浴の際に笑顔や手を動かしたりと多くの反応が見られていた。様々な思いをかかえてこれまで生活してきた入所者さんがいかに楽しく生きがいを持って、安全安楽に過ごしていけるのかを考えながら看護していくことの大切さを学ぶことができた。

五所川原市立高等看護学院

五所川原市立高等看護学院　佐藤穂実

施設見学を終え、看護を提供する者として考えさせられる部分が多かった。

初めに、石川会長の講話では、ハンセン病の過去の歴史、現在の状況を話していただいた。人目につく身体の表面に病変が出現し、人々に恐怖心を与え、排除の原因となっていた。それは、国家・人がそうさせたということに苛立ちや悲しさを感じた。強制隔離がされなかったら、違う人生を送り、本名で生活ができたのかもしれない。何より家族と生活が送れたのかもしれないと考える。しかし、今だからこそ私はこのように言えるが、もし実際の時代に生きていたら、私もどのような行動をとっていたかは想像ができない。そのため、石川会長がおっしゃっていたように、「人の気持ちには恐れの気持ちがある」という発言にも納得が

できた。また人は、人によって左右されるものであると思うと自分の本当の気持ちが怖くなった。

また、無らい県運動で施設内結婚が認められたが、子孫を残さないというところが自分の中で引っ掛かった。女性であったら子供を産みたいという気持ちは誰にでも存在すると考える。その中で、平成八年に母体保護法が改正されるまで、避妊手術や人工妊娠中絶をさせられ、生まれてくる子供の人権までもが人に左右されていたことがとても許せない。

また、ふれあい福祉だよりにも出てきた言葉のように、医師からの「育てる自信があるならいいよ」という言葉にも違和感があった。生まれてくる子供には罪はなく、人に左右されるものでもない。人間として人間らしく生きる権利が尊重されていないと考える。

入所者さんとの交流では、たくさんの過去の歴史を直接聞くことができ感動した。話されるのが辛い、苦痛なのではないかと思っていたが、皆さん時間の限り多くのことを私達に教えてくださった。もっと時間が確保できたのなら、今日以上に多くのお話を聞きたいと思った。また居室や娯楽室を訪問し、楽しみの時間や健康の秘訣、歌を披露してくださりと多くの入所者さんの笑顔を見ることができ、心が満たされた。入所者さんの「皆さんにいい看護をしてもらい生きています」という言葉を聞き、私も看護を提供する者として、きちんと患者様と向き合い患者様に寄り添うことができているかを見つめ直した。疾患ばかりを見て、患者様の表情や態度を見落としていないか、自分自身の看護観を振り返るキッカケとなった。患者様に心から優しさと思いやりのある気持ちで安全で安心できるような看護を提供したいと思った。

最後に、施設見学を終え、今日までハンセン病という疾患を詳しく学習を深めずに看護師を目指していたことが恥ずかしかった。また過去の歴史が同じ人間として理解ができなかった。しかし、このような歴史を忘れ去られてほしくない、次の世代にも繋げてほしいのが、率直な思いである。一人一人が正しい知識を得て、第三者ではなく自分の問題として考えていこうと思った。今日は、とても自分の人生の中で、良いものとなり絶対に忘れてはならない一つとなった。これから先看護を提供する者として、きちんと思い続けていきたいと思う。

五所川原市立高等看護学院三年　三上佳寿美

松丘保養園を見学するに当たり、前日家族でハンセン病について話をした。家族からは「強制隔離・視力を失ってしまう・外見に障害がでる」などのキーワードが出た。弟はハンセン病という言葉すら知らなかった。ハンセン病の過去と現状についての理解を深めることを目的に実習に臨んだ。

講義を受けたことでハンセン病がどのような病気でどのような症状が生じるのか理解できた。ある入所者は自身の経験談を話してくれた。そのときは風邪気味で免疫が低下していたそうだ。病院でハンセン病と診断され職場に報告しにいったそうだ。職場に近づくにつれて強い消毒液のにおいがしたそうだ。上司に休暇を取るように言われ家路についた。自宅に近づくにつれまたあの強い消毒液のにおいがし、到着すると家の中は消毒液で真っ白だったそうだ。家族も泣いて立ち尽くしていた。自分はただただ「ごめん」と謝ることしか出来なかったそうだ。施設入所までの生活は近所で買い物も出来ず、周りからは心ない態度や言葉を言われ、本気で「死にたい」と思ったそうだ。文章で理解するだけでなく実際に体験された方の話を聞くことで理解はさらに深まり、なによりその方の体験した消毒液の鼻を突くにおいだったり、家族が悲しんでいる姿、周りの心ない態度などの細かな情景が脳裏に鮮明に浮かび、とても胸が苦しかった。

好きで罹患したわけではないのに、周りに正しい知識がないことがここまで恐ろしい結果を招くということを痛感した。前触れもなく突然人生を遮断された彼らの壮絶な過去はただ「歴史」という一言で片付けられないし、片付けてはいけないものだと感じた。

入所者の話を聞いていると国家に対する不信感が大きくなった。外見が崩れていくことが一番関係しているのか、ハンセン病に対して異常に反応し、一番大切な人権よりも社会防衛を優先させてしまった。国家の対応の改めの遅さに落胆した。ハンセン病は投薬治療で完治するものだと判明したという事実をもっと伝えるべきだと感じた。しかし本日講話を聞き何も知らなかった私達がハンセン病についての理解を深められたことや彼らの思いを知れたことはとても意味のあることでこれが次世代への継承なのだと感じた。ハンセン病患者は現在後遺症と共に生きている。しかしこれは過去ではなく今現在にも続く社会問題で、私達も関係

はあると感じた。帰宅後家族ともう一度話をし、「ハンセン病について認識が変わった」という言葉が聞けた。このような家族という小さな社会でも正しい知識の理解が出来たことはハンセン病患者が望む正しい知識と偏見のない社会への一歩なのだと感じた。

現在ハンセン病患者の平均年齢は八十歳代で高齢化が進んでいるようだ。高齢化に伴い身体機能の低下や認知症の発症がある。保養園全体で認知高齢者への環境づくりとし棟内を四季を感じる装飾や思い出をよみがえらせるような空間を作るなどの取組をしていた。それにより入所者はその人らしさを取り戻せたり周囲への関心を高めるといった効果が見られているそうだ。関わりではユマニチュード技法を用いコミュニケーションを行っていた。以前勤務していた病院での看護師と全盲の患者との関わりを思い出した。看護師は患者と目を合わせようとせず、会話をしながら書き物をしていた。患者は看護師の声を探してその方を向いて話していた。私はこの場面にとても違和感を感じた。今回九〇歳全盲の男性入所者と看護師との関わりを見学した。看護師は相手が全盲であっても入所者の見えない視界に入り目線を合わせていた。この場面を見たとき、「あの場面に違和感を感じたことは間違ってなかった。これが本当の看護だ」と感じた。この場面以外にも今回の実習では相手への思いやる心をたくさん感じた。「知力を尽くし、心を尽くす」

これが看護の真髄なのだと気づけた実習だった。

松丘の猫をさくら猫へ

甲田の裾編集局　石田史子

平成二十八年八月、福祉室で一匹の子猫を保護したことから、私は生涯で初めて猫を飼うことになりました。これをキッカケにこれまで関心が無かった松丘保養園の猫たちを観察してみました。

まず、松丘でノラ猫と呼ばれている猫たちの居住地帯です。保養園の西側にある独身寮の近辺で十一匹確認出来ました。

これは、居住者が独り身であること、普段は職員などがあまり立ち入らない寮であるということも関係していると思います。

独立した玄関、掃き出し窓、通路には冬になると融雪マットが敷かれることも猫たちには寄りつきやすく、入園者も餌を与えやすい環境なのでしょう。

以前、園として飼い猫には首輪を付けること、それ以外は捕獲して保健所へ引き渡すと通達したことがありました。猫の糞害等で困っている入園者から再三の苦情があったからです。

しかし、首輪が付けられた猫はほとんどいませんでした。今回、猫に餌を与えている入園者に話を聞いて納得しました。

「自分達は飼っているわけではない。可哀想だから餌をあげているだけ」というのが大半の言い分です。

昨年八月に保護された子猫は三匹でした。三匹とも園の東側で発見されて、園内では見かけない毛色の猫でしたので、園外の人が捨てて行ったのは明らかです。この松丘の深い森は、遺棄しやすい場所になっているようで、毎年東側の住宅地と隣接する場所では春になると子猫達の鳴き声がするのを近隣住民は、「またか」の思いで聞いていたそうです。気の毒に思って、何匹も保護して育てている方もいると聞きました。

入所者もそうして捨てられている子猫をほっとくことが出来ずに、餌を与えているうちに増えてきたもの

マイナス６度の外気温の中、
融雪マットで暖をとる猫たち

と推測されます。

猫は生後六ヶ月ほどで発情期を迎えます。それは動物の本能ですから止めることは出来ません。一匹が五匹くらいの子猫を産みます。この森の中ではカラスなどの天敵も多く、また雄猫に襲われる子猫もいますので、生き残るのは一匹から二匹なのですが、その子猫がまた子猫を産んでと、松丘の猫は増えていったのだと思います。

平成二十一年から二十五年の間には、保健所に引き取られた親猫と子猫は六十匹近くいたそうで、通報がある度に捕獲して保健所へ引き渡す職員の心労・苦労は計り知れないものがあります。

あまりにも引取数が多いということで、譲渡を目的としたボランティア団体「ワンニャンを愛する会」を紹介され、子猫は譲渡会で里親を探す方針をとることになりました。

ボス的存在　長治郎さん（仮称）

二十八年は、十匹の子猫が保護されましたが、幸いなことに園内職員、松桜会会員、譲渡会を通じて、保護された翌日に死亡した一匹を除いた九匹に里親が見つかりました。

子猫の母猫の中には、八月に亡くなった入園者の飼い猫も含まれています。

一般的に栄養状態のいい猫は、出産回数も多いそうで、定期的に入園者よりエサを貰っていたこの母猫も何度か出産を経験しておりましたが、その都度入園者が処分していたそうです。昨年は春夏二回の出産で三匹の子猫が生き残りました。

飼い主である入園者が亡くなり、行き場のなくなった母猫は西側地帯の猫のグループに加わり、ノラ猫として生活しています。今まで一定の飼い主から餌をもらい生きてきた猫にとって、先住の猫たちと混じり餌を得ることは容易ではないことです。これからまた恋の季節を迎えるともっと厳しい現実が待っています。

亡くなった飼い主は、猫に避妊手術を進めても首を縦にふらなかったそうです。かつて自分達が苦しめられた断種、避妊手術を思い出していたのかも知れません。

今、一般社会でも飼い主を亡くしたペットの行く末

が問題になっています。譲渡会でも猫の寿命十五年位と考えて、ある一定の年齢以上の人には譲渡しないことになっています。

亡くなった入園者は、この園の中で唯一の家族だった猫のことがどれだけ心残りだったか、そして猫もエサをくれ可愛がってくれた飼い主を突然失い、いまだに飼い主の姿を探し追い求めているのです。

残された私達に出来ること。これ以上不幸な猫を増やさないために、今いる猫たちに去勢、避妊手術を受けさせて、松丘の地域猫として一代限りで見守るという方法があります。今いる猫たちは、飼い猫ではないにしても、餌を与えている入園者にとってはかけがえのない存在になっているからです。

ハンセン病療養所は社会の縮図と言われております。社会でもノラ猫問題は最近話題に上ります。地域住民の協力で去勢・避妊手術を受けさせた猫の耳を桜の花びらのようにカットすることから、地域猫は「さくら猫」と呼ばれて、地域のボランティアによって支えられます。

白　玉男さん（仮称）

地域のボランティアがエサ場やトイレなどの清掃を分担して請け負います。エサ場は一カ所にまとめて、エサもボランティアや地域住民の協力を求める。トイレは砂場の設置やプランターなどに砂を入れて猫が排泄しやすく、人間が片付けやすいものを準備します。猫は犬よりも綺麗好きですので、環境を整えてあげれば何匹かは順応するはずです。そして、北国の松丘の場合、冬の寒さを凌げる部屋を用意出来ると、猫好きの入園者、職員が触れ合える「癒やしの部屋」になるのではないでしょうか。

平成二十九年二月十七日、松桜会の援助、ワンニャンの会の協力で、松丘に「さくら猫」が一匹誕生しました。これは、福祉室職員にとっては長年の悲願であり、地域猫活動への始まりでもあります。

この厳寒の最北の療養所で、融雪道路で暖をとる、名前も寝床も持たない猫たち。それでも生きなければならない命です。心ある方、関心のある方の協力をお願いしたいと思います。また、各療養所、自治体などでの対策・取り組みなどお知らせいただければ参考に

したいと思いますので、甲田の裾編集局までお願いいたします。

桜の名所、松丘にさくら猫。ノラ猫だけど、みんなに見守られてのんびり暮らす猫たち。そんな猫たちと共存できる療養所があってもいいのではないでしょうか？

手術済の猫は、耳の先端を桜の花びらのようにカットします。

松丘さくら猫１号　命名「サクラ」

人事異動

【採　用】

（期間業務職員）

看護助手　西田（にしだ）　智子（ともこ）（中央センター２階勤務）

（平成28年10月17日付）

【退　職】

看護師　花田　未保子

（平成28年12月31日付）

【採　用】

内科医長　若佐谷（わかさや）　保仁（やすひと）

（弘前大学脳神経内科学講座講師より）

作業手（除雪）工藤（くどう）　尚彦（なおひこ）（福祉室勤務）

（平成29年1月1日付）

【退　職】

（期間業務職員）

看護助手　金子　理香

（平成29年1月13日付）

【採　用】

（定員内職員）

看護助手　嶋中（しまなか）　恵美子（えみこ）（賃金職員より）

（平成29年2月1日付）

自治会日誌

十二月中

1日　12／1付採用・昇任職員4名　挨拶に来訪
〃　12／1付採用除雪作業員4名　挨拶に来訪
2日○2センターとの話し合い
〃　第3回執行委員会
5日○中央センター1階・2階との話し合い
6日○1センターとの話し合い
8日　五所川原市立高等看護学院3年生33名　施設見学の為来園　石川会長が講演
〃　真宗大谷派奥羽教区4名来訪
12日　12／31付退職職員1名　挨拶に来訪
16日　年忘れお楽しみパーティー
19日○厚生労働省専門員来園
〃　国立感染症研究所ハンセン病研究センター森修一氏外2名来訪（自治会資料調査）
26日○新城中ボランティア（～27日）
28日　御用納め

一月中

4日　御用始め
〃　年始交歓
〃　1／1付採用　若佐谷保仁内科医長　挨拶に来訪
10日　デーリー東北新聞社　三浦記者来訪
12日　保健科運営委員会
〃　笹川記念保健協力財団　喜多理事長　外1名来園　石川会長面談
17日　第4回執行委員会
〃　真宗大谷派　本間氏来訪（シンポジウムについて）
18日　第3四半期自治会会計業務監査（～19日）
19日○岩手県来園
20日○歌っこ広場
23日　真宗大谷派奥羽教務所　松岡氏来訪（交流会について）
26日　甲田の裾編集局企画運営会議
〃　○高知県来園

編集後記

近年の世界各地での異常気象が影響したものか、豪雪地帯として名高い青森市は珍しく雪の降らない新年の始まりとなりました。一般市民にはありがたいことですが、除雪を仕事にしている人、農家にとっては少々心配な年明けだったようです。正月三が日に降る雨雪は「天からの御下がり」といって豊作の印であり目出度いとされるからです。今年はけがじ（飢饉）だと懸念される声もあり、私共も他人事と言っていられません。私共の食卓にも少なからず影響を及ぼすことになるのですから。　（佐藤　勝）

園内の出来事

2月8日　新城中学校　合唱会

新城中学校３年５組38名による「おでかけコンサート」。混声四部合唱で黒人霊歌など３曲披露しました。

2月11日　県ハンセン病パネル展「ハンセン病を正しく知ろう展」

青森市の大型ショッピングセンター サンロード青森で開催。今回は大好評の「思い出食堂」を中心に入園者と職員のふれあいを紹介しました。

遊歩道完成　平成28年12月

保養園と西側道路を隔てていた土塁を削平、落葉松林を一部伐採・整備されて遊歩道が完成。入所者の散歩路として、また新城中学生、近隣住民などが安全・安心に通行出来るようになりました。

昭和五年十二月十日創刊
平成二十九年二月発行　第八十八巻　第一号　通巻六九二号

松丘保養園

国立療養所松丘保養園要覧

松丘保養園は国立のハンセン病専門の療養所で、創立してから今年で108年の歴史があり、ハンセン病患者の医療と福祉を事業としております。

所在地　青森市大字石江字平山十九
園長　川西健登
保有敷地　二三〇、五四八平方米（六九、八六三坪）
建て面積　三〇、三五八平方米（九、一九九坪）
延べ面積　三六、〇三六平方米（一〇、九二〇坪）

交通案内

□電車の便
1. 東北新幹線・新青森駅下車（車で約3分）
2. 奥羽本線津軽新城駅下車（車で約5分）

□バスの便
1. 青森市営バス西部営業所行
2. 弘南バス浪岡・五所川原・黒石行き　共に松丘保養園前下車

□航空機の便
青森空港より（車で約30分）

□高速自動車道の便
青森ICより（車で約5分）

□なお保養園に隣接して桜の名所三内霊園（1㎞）と国の特別史蹟指定の三内丸山縄文遺跡や県立美術館（2㎞）等があります。

発行所　一般財団法人　松丘保養園松桜会
所在地　〒〇三八―〇〇〇三
青森市大字石江字平山十九番地
電話　(017)(788)〇一四五・〇一四六
発行人　川西健登
編集人　甲田の裾編集委員会
印刷所　青森市本町二丁目十一―十六
青森オフセット印刷株式会社
電話　(017)(775)一四三一番